

あの世に届けメッセージ受け、ポスト付きお墓

若くして逝った著名なレーサーのお墓が2回の大賞を獲得している。いずれも亡くなくてもなお天才レーサーを慕うファンのためにメッセージが入れられるように「ポスト」が設けられている。

埼玉県さいたま市の加藤 隆(当時 51 歳)のお墓は、オートバイレースの決勝で不慮の事故のために帰らぬ人となった息子である郎さんのお墓。お墓にはありし日の息子が疾走する勇姿を描いたレリーフとともに、石で作った郵便ポストを設置した

故大治郎さんは、3歳の誕生日に両親からポケットバイクをプレゼントされたことがきっかけでサーキットに通いはじめ、5歳でレースデビュー。11歳でミニバイクにステップアップした後15歳までに数々のレースで優勝、シリーズチャンピオンを獲得。運転免許と競技ライセンスを取得した16歳から本格的なロードレース活動を開始。一貫してHondaのマシンでレースに参戦し、2001年世界選手権 GP250クラスシリーズチャンピオン、文部科学省スポーツ功労者顕彰を受ける。2002年には世界耐久選手権鈴鹿8時間耐久総合優勝。2003年4月6日、三重県の鈴鹿サーキットでの事故により逝去。故本田宗一郎さんのお墓と同じ「庵治石」でのお墓づくりを目指し、隆さんは石の産地である香川県の庵治町までわざわざ出かけたり、加工場にも何度も足を運んだ。こうしたお墓づくりの過程で多くの人と心の交流が生まれたことが嬉しいと語る。



第22回で大賞を受賞した埼玉県吉川市の高橋晋一さん(当時50歳)のお墓は、オートバイの世界選手権MotoGp、日本GPにも出場していたレーサーの次男のお墓。こちらはレース中の事故ではなく、一般の交通事故で亡くなった。5歳からポケットバイクを始め、小学生の時には全国大会でも優勝するほど。高校生時には全日本ロードレース選手権に出場するまでとなり、初出場、初優勝という成績も収め、世界選手権のMotoGp、日本GPに出場するまでになった。そんなレース三昧の人生の最中、東北震災が起こり、復興支援の為にチャリティイベントに参加。沢山の方々の協力を得て義援金もたくさん集まりイベントを無事終えての帰路、



交通事故で23歳の生涯を終えてしまった。レースと人生のゴールを意味するチェッカーフラッグ型墓石と、筑波サーキットのシンボルでもあるコースに架かる巨大なダンロップアーチをデザインしたお墓を建立、さらに墓前の右端には天国の次男につなぐ石製の立派なメッセージBOXも設けてある。